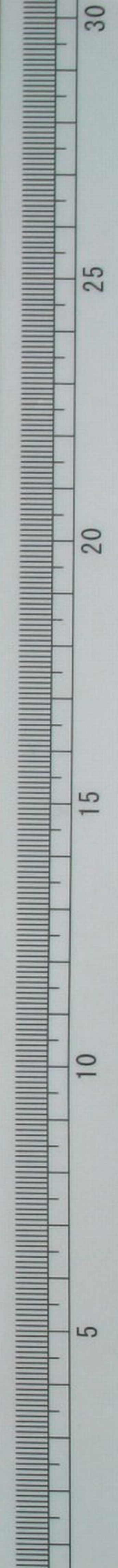


湘莊小錄

五

特別
14
1919
87



15
1880
7

14
1919
7

同
川
同
同

○家康の代の外次大輸入

徳川家康の眼病を懐かむといふ一因即ち此の
公の眼の明暗を天下の休戚子孫と云ふの如
く思ふ所にして死を以て然るを支那の文を
けりあく飛けしむを海にるるを支那紳士の中
に眼科の名人が有ると云ふ事以て人々を
もしてねむしめたるは其の事也
也此人の事蹟を記す所の眼病の助
のひ非を工を告いし海行ししを
あつて

昭和十六年十月十七日
本島謙吉氏贈

の終りも中にも終りて復と稱して五千の兵を遣はして出
うけたるに長蛇の陣と云ふに、それこそ
め道にさかぬ紀伊と云ふ所の女も道にのほり
て政をささる、本邦を治るも、此の道にのほり
ぬ、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
し、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
あり

○女史一

所方の前夜に終りて、世の政用をささる、し、その
かして、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
と、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり

東京府

殿、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
い、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり

一、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
ア、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
く、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
い、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
い、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり

一、その道にのほりて、道にのほりて、道にのほり
権の大札に王徳海の其弟の其弟の其弟の其弟の
因縁のあり大祝、唐をいふ、その道にのほり

程

一横濱の木村利石先生の説を説くところこしに
ナ、一寸出ました。貴方を清もも俳諧の方
がよろしい。なごい。流派の方を子供扱ひに
一其のワレのふり、二其のふり、二十式年本漢
又まゝに流を流したる面あり。此の流を扱ひ
出まを真人之息以経を言ひしとそふま
おもむろかゆら

一此巻の横士の体も本函を流すを問か
こ問が、貴方又わらうやうか、... 此の病氣
か、死うやうと、とやうしに、まゝと体も本
おもむろかゆら

松林園製

少し此と氣味む、死うまゝと笑ひてさう
一ど、七、八、九、と世にとおもひておそ
て、こまゝのうら、おこらせとまゝし
いのそむ

中島信より清の方で、のし、望に、し、扱ひ
れ、も、子、ら、と、久、に、の、り、の、扱ひ、奥、村、五
ろ、ま、あ、ん、と、あ、の、う、け、も、一、婦、の、女、ま、い、ひ
あ、い、と、あ、い、し、い、と、あ、い、つ、も、あ、天、の、あ、い、え、
え、ろ、し、と、あ、い、し、い、と、あ、い、い、え、
あ、い、し、い、と、あ、い、し、い、と、あ、い、い、え、
あ、い、し、い、と、あ、い、し、い、と、あ、い、い、え、
あ、い、し、い、と、あ、い、し、い、と、あ、い、い、え、

入るものがある。全回く、その大勢利己主義の彼ら、
あつとそつとさうさうと彼らをして、
てし又彼らとせん又は代り替へるの如くして、
あるべき年の風潮の如く、
まや道徳の海に沈み、
えわす位であつた。その時、
まはた、
かつの格を此の危険を救済せんば、
つとまゝ、
之の懸念を救済し、
此協伏さうおや、

録
録
録

ニッケーを排斥して、
同くする、
之は、
えんそ系、
其情も、
次で、
エゴイ、
うを、
と、
此、
年

後七怒りしと病いぢらしてあたまこ

電の又左より(勝首)こころは後流を父の流る

あまのぬふりにせむはる道はたのしむる上木は

ふとまのり又入ぬとまのまあはる(たをまのり)川打

傳衣まのり津まのり油のまのり川村まのり入るまのり

そこのまのり花の上まのりまのり固めなまのりまのり

一けん火入と蒲軒ぬまのり(おまのり)まのりまのり

蒲けおまのり(まのり)

まのり鳥渡所まのりまのりまのりまのりまのりまのり

りまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

料紙原紙

かきまのりまのりまのりまのりまのりまのり

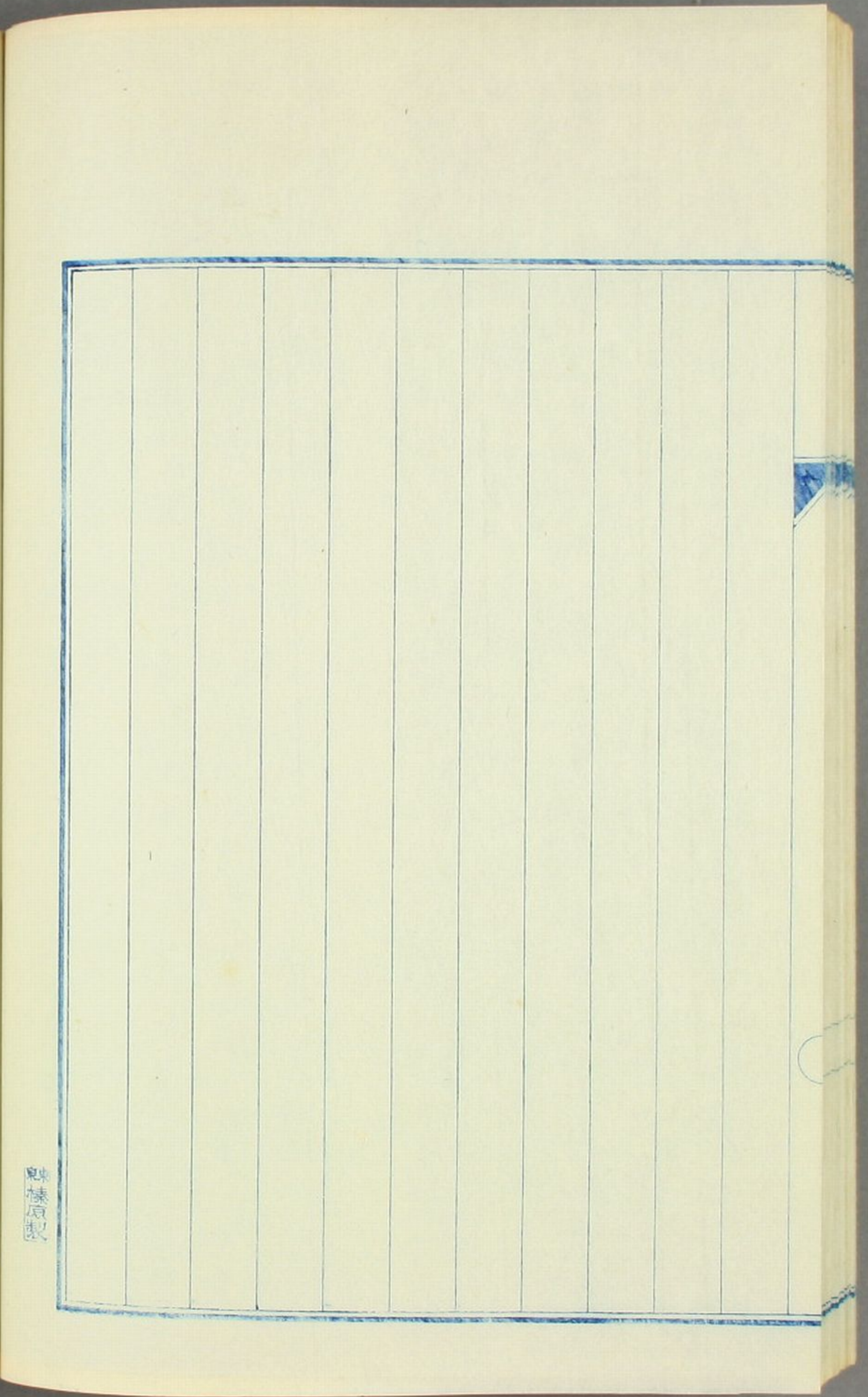
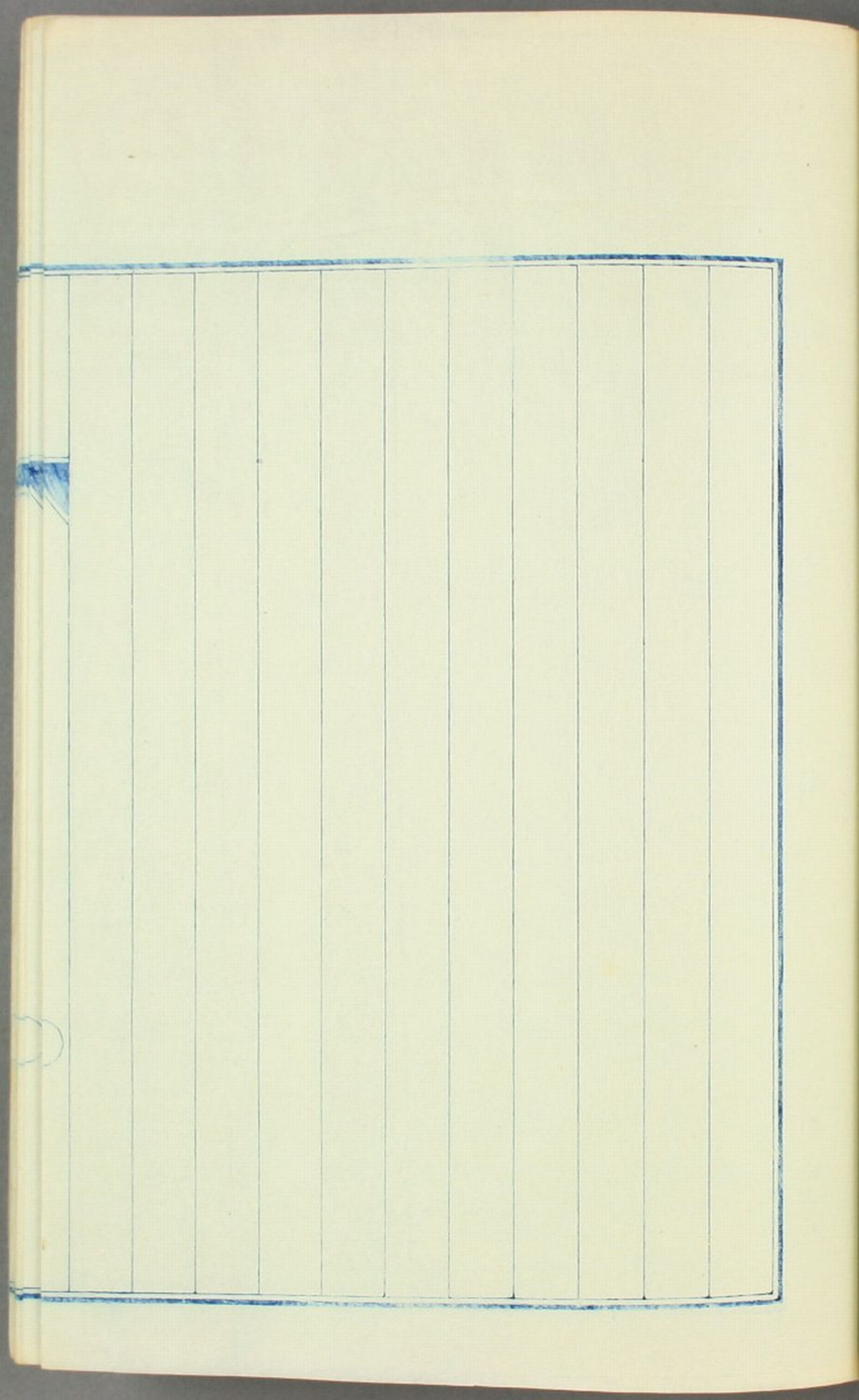
まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり



蝶
標
原
製

以下
8丁
白紙

●字華の語

彌生山人

字華の運送人が罰せられし事屢々新聞紙に見ゆれど、其の物の如何を知るもの少し、今之に精通する警察吏に就て聞きたる話を左に記さん、字華の支那に行はる、博奕の一種なるが、明治の初より日本人間にも行はる、事となりぬ、初の支那人が親元をなし、が、今日本人催主として之を興行する者多し、字華を買ふに少しく思慮を費さ、れば之を當て得がたきと、明和の頃盛に行はれたる三笠附など云へる者に似たり、字華の一種の當て物にて、先づ三十六の題あり、三十六題又分ちて九棚とす、催主の之に依りて題を出すなり、九の棚及び三十六題の解左の如し、題の読み方今の日本風に唱へて、而も無學なる者の出鱈目に音を付したるもの多し、江祠をエドゥと訓むなど、随分無茶なる読み方なり、

一公手 安士の狐、稻荷、僧侶。此棚の二道士の左の方にあり
右の外、解釋の種々ありて、一の解釋によりて之
の棚の兩脚の間にあり
元蜘蛛、役者。元吉、鹿、麩者。吉品、羊、女陰。此
五乞士 元貴、蝦、蟹、陽物。萬金、蛇、貨幣。青
摩、井利、鯉。此棚の人體の右傍脚の邊にあり
四和尚 火官、龜。日山、日、鶴。天良、鰻、按
邊にあり
烏、軍人。太平、兵卒、龍。此の棚の人體の左傍腰の
體の左傍胸の邊に記したり
四好命 三桷、猿、暗摩。合海、蛤、海賊。九官、
招の女郎、赤馬。合同、大賊、新嫁、鳩、此の棚の人體
の棚の人體の左傍脚の邊にあり
四夫人 良玉、女賊、蠶、蝶。明珠、酒、癩病。上
二道士 青雲、青雲、鶴。天申、雷、浮浪人、此
の棚の人體の左傍脚の邊にあり
七將利 江祠、船、飛龍、船頭。福孫、犬、斥候、
光明、白馬、米。有利、瓜、相撲、象。只得、猫。必得
の鼠。茂林、蜂、巡查。此棚の人體の右傍にあり
二道士 青雲、青雲、鶴。天申、雷、浮浪人、此
の棚の人體の左傍脚の邊にあり
方肩の上に記されたり
龜、獅子。坤山、虎。漢雲、白雲、牛、此棚の人の左
邊にあり

四上元 占魁のむかで、汽車、汽船、板桂、盜
賊、榮生、死人、小兒、出生、逢春、孔雀、雀、此の棚
の人體の右方肩の上に記されたり
五黃將 志高、蜘蛛、土、月、寶、月、兎、正順、蚤

此棚の題

を敷演し、數多の解釋をなすなり、猶九つの棚の外に此三十六題を人體の各所に配して、體中に記したるものあり、催主の此の圖を利用して、題を正當に解釋せず、通題、逆題等の出題法を行ふなり

買入 字華の催主と運送人と買入との三者より成立つ、催主の五六人より二十八位までの運送人を使用し、毎日題を出して之を配付せしむ、毎日朝夕の二回、運送人の買入より答案を集めて出頭する故、催主の之と勝負して金錢の出入計算をなす、運送人の自ら答案の式紙即ち筋紙を作りて所持し、之を催主より受取れる題を毎日二回買入に配付し、同時に先の勝負の結果を報告し、當りなれば之に金を渡す、此の時買入の手數料として買ひたる時の出金額の二倍を運送人に贈る例とす、買入の多く下等社會にして、題を了解するの力ある者なく、無意識に出題目を買ふことにて、今朝の夢に狐を觀たれば狐(安士)を買はんとか、先刻盜賊の話を聽きたれば盜賊(板柱)を買はんとか云ふの類なり、之を見得と云ふ、而も偶然當ることありて、當れば催主より三十倍の金を得る定めなり

にすることが多し、運送人相會したる時、催主の先づ一卷の軸を机上に出す、之を題を振ると云ふ、此の軸の同じ形の軸三十六巻ありて、各々三十六題の内の一題を記しあり、催主の其内適宜の一題を選みて此に出すなり、次に運送人毎に其の筋紙の枚數及び金高を記帳し、次に運送人中の一人より順次開卷勝負を始む、某甲の取次に係る買入に何を買ひたる者何個、何を買ひたる者何個と、人氣を下知する爲に帳簿に記取を、此の間催主の己の出したる巻物と、買入の買ひたる節と符合する者多きや、將外れたる者多きやを胸算し、職々競々たるなるべし、而して各筋紙に今回何々が當りなりと云ふ事を證する爲め、催主の題の文字を彫りたる印を押す、終て當と外れとを合計し、催主の收人となる金と、當り札に渡すべき金とを差引計算して、其運送人の先去り、次の運送人と勝負す、故に催主の得となるもあり、損となる事もあるなり、而して外れ即ちパンのみなれば、運送人への手數料なき故、車代又ハ筋紙の印刷費として、百個又ハ百枚に付何程の金員を與ふる催主あり、

題の出し方 催主の寫本にて種々の事を書きたる書物を所持し居り、題を出すに、五字若くハ六字にて、適宜の文句を作りて與ふ、例へば、題に名月湖水照とあれ、字華を買ひたる人、之を月と判じて月寶の處へ點を付くるも正當なれど、或ハ盤と判じて板柱の處へ點を掛くるも可なり、又例へば太陽東天昇とあれ、鶴と判じて日山を買

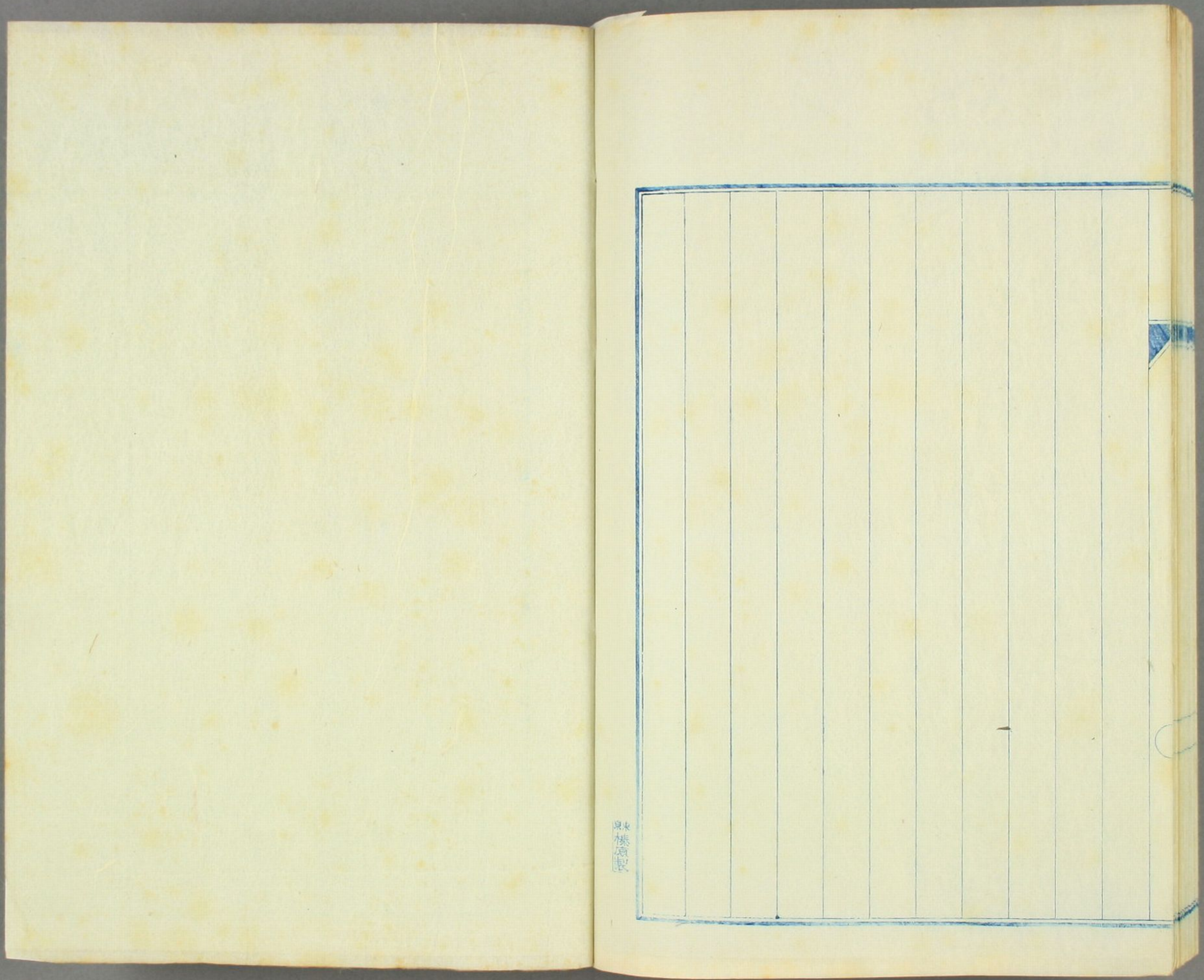
ふも可なり、元より買入の考へ次第にて、題と關係なき筋を買ふても可なり、一日二回、即ち朝夕の興行の題ハ一紙に印刷して配賦す、此紙を花と云ふ、俗に題紙と唱ふるなり、買ひ方 三十六題の名ハ一枚の紙に記しありて其下に各々空白あり、之を筋紙と云ふ、故に買入の其の買はんと欲する筋の空白へ、若干個と記し紙末に己の名を符牒にて記して投す、是答案なり一個に付き、代金一錢なれば、二個買ふ時ハ、二錢を添へ、十個ハ十錢を添へて出す、當れば此の額の二倍を運送人に贈るなり、勝負 右の投したる答案數百枚集まりたる時ハ運送人の時刻を期して、會場に至る、會場ハ秘密にして、警察官に知れざる様、其の都度場所を異

花と解との關係 催主が題を出す時に、必ず豫め何を振るべきやを確定し置き、太陽東天昇と題を出せば、其の勝負に至て、必ず日山の巻物を振べき筈なれども、必ずしも、然らず、如何となれば斯く定まりたらんに、智慧ある買入の常に勝利を得べく、斯くてハ催主の不利なれば、催主の題と相違せる巻物を振りて勝負するをあり之を裏と云ひ、又ニゲと云ふ、併し其ハ矢鶴に理由なき題を振るを得ず、必ず本題に縁故ある題に逃るなり、例へば同じ棚の内なれば、通じて振ることを得、即ち日山ハ四和尚の棚に屬すれば、四和尚中の他の題を振ることを得べし、又八体圖上に記す所に從ひ、左右、上下、三角形等に線を畫して、同線路にある題なれば、相通じて振ることを得、故に三十六の變化して七十二となり、百四十四となり、何れの巻物の現るべきやハ買入に於て豫測すべからず、併し催主に在てハ、何故に此花に對して、此の巻物を振りたるやとの質問に對して、辯解の付く文の用意ハ無かるべからず、出題と巻物との常に幾分か縁故あるを要するなり、但志高と安士に限り、題に縁故の有無に係はらず

何時にても振ることを得るものにして、一の例外
なり、然れども例外物のみ二回續けて振ること
爲し得ざるの定なりと云ふ、右の如く、變幻出沒
極りなきものなれば、買人の必ずしも題意に依ら
ず、自分の買はんと欲する筋を買ひて當りを得る
なり、

没了、催主の故に買人の人氣を參考し、題を振
るに細心注意して、成るべく買人の買ふまじと思
ふ場所の巻物を出すなり、然れども買人も亦其の
裏を搔くを以て、案外にも、催主の擇み出せし巻
物に符合する買株多きとあり、若し開卷の中途に
於て、猶ほ開卷を引續けたらんに、當りの數非
常の大多數を生ずべしと思惟する時、催主の直
ちに開卷を中止し、巻物中にある文字の何たるを
告げず、開きし文の筋紙に記載ある株數を總て當
りで見做し、其の代金を支拂ひて、未だ開かざる
分の勝負を謝絶するの權あり、之を没了と云ふ、
此の場合に、買人の初め出したる金の返附を受く
るなり

の如きも蕎麥屋の出前持乃至女髮結の類など様々
の八種を使用し、警察の眼を避くる工夫怠りなけ
れば、時として之を捕へて催主を問へども、橋上
にて人に託せられて届けたるのみなりとか、此の
紙の如何なる者なるか知らずとか、種々の言ひ
抜けを爲して罪を遁れんとする者多く、催主の終
に搜り得ずして、現行犯なる運送人のみを罰し得
るに止まるゆゑ、遂に其の根を絶つと能はずと云
へり



泉
樓
原
製

明倫彙編 家範典 卷之四十四 年十二月

念五起 某

執事 某

某 某